

スターバックス

2022. 2. 21

スタバと言え、スターバックスコーヒーである。今でも覚えているが、世の中にスターバックスが認知され、何かと話題に上るようになってきた時期があった。しかし、その頃は福島にはなかった。こういったことはよくある。そのため福島人は慣れてはいるのだが、一抹の寂しさがあることは否定できない。いつしか福島人にとって、スタバはあこがれの存在となっていた。

ついに福島にもスタバがやってきた。と思ったら、県立福島医科大学附属病院の中だった。これでは、なかなか行けない。そこから、しばらく年月が経過した。今度は、交通の便がいいところにも駅の中にも出店してくれた。ありがたい。これで、いつでもスタバに行ける。

ということで、ようやく福島人にもスタバは身近な存在となった。先日、家人と車でスタバに行った。店内に入ると、意外と混んではいなかった。ノートパソコンを打っている人がいる。参考者や問題集の類を出して勉強している人がいる。耳にはイヤホンである。私には、これができない。音楽を聞きながら勉強をするということができない。静かなところでないと勉強はできない。文庫本を出して読んでいる人もいる。スマホを操作している人がいる。いずれも、スタバでは、よく見られる光景である。我々かというと、どのタイプにも属さない二人だった。

我々が席に着き、ほどなくしておばあちゃんとお孫さんの二人組が近くの席に着いた。新鮮な組み合わせである。ご高齢ではあるが、しゃれた感じの女性だった。その向かい側には、20代前半の学生らしき男性が座っている。

日曜日の午後に、若者がおばあちゃんを連れてスタバに来ているのである。素敵なシチュエーションである。若者は、我が家の長男と同じくらいの年齢である。うちの息子も、あんなことができるのだろうか。ふと、考えてしまった。

見るつもりはなく見てしまったのだが、若者はおばあちゃんを気遣いながら、店を出ていった。席に着いている最中も、二人の間には、さほどの会話はなかった。それでも大丈夫な関係なのだろう。とても初めてという感じはしなかった。

こんな若者がいるのだなあ感慨深くなった。優しい時代になったものである。ご高齢の方がお孫さんとスタバに行けるような時代がきたのである。これならば、高齢化社会が進んでも明るい見通しが立つのだが、そう簡単にはいかないのが現実である。

人を観察するために、家人とスタバに行ったわけではなかった。だが、結果的にそうってしまった。店を出て、何だか気分がよかった。新しいスタバを見たようで快かった。この次のスタバも楽しみである。